

武田泰淳の文学における父親のイメージ

ハートリー バーバラ
HARTLEY Barbara

要 旨

本研究の目的は、戦後作家、武田泰淳の文学における「父親」のイメージを分析し、そのイメージがどのように近代日本の典型的「家父長制の父親」像、そして「家」の規範に疑問を呈するかを考察することである。ここでは、泰淳の長編小説『^{けらく}快樂』を題目にとりあげる。昭和三十五年一月号から三十七年十二月号まで、四十五回にわたり『新潮』に連載された小説で、昭和四十七年刊の単行本の「あとがき」に、「四十五回という長期連載の積み重なった疲労のため、中断せざるを得なかったが（中略）改めて稿を続けたいとおもっている」^①とあるように未完である。兵藤正之助が指摘したように、『快樂』は「総じて言えば、（昭和）三十年代に到った武田にして、初めて展開し得た人間論が、重厚に筆致で描かれて」おり^②「三十年代の武田の代表作」^③ともいえる小説であり、その分析は武田泰淳研究に不可欠であるといえよう。本稿の主な関心は、『快樂』に描かれている父親像がいかに戦前の覇権主義的な究極の「男らしさ」に対抗しているのか、また、いかに規範におさまらない独自の「男らしさ」を提示しているのかを追究することにある。

第1節 申し分のない父親とだらしのない息子

『快樂』は私小説の要素を含む作品で、筋は仏教僧侶の資格を受けた泰淳が徴兵され大陸に派遣される前、目黒区にある寺院で青年僧をしていた頃の人生体

験に基づいている。柳という十九歳の主人公は、その浄泉寺という寺院の住職である父親を手伝っている。人生の目的を持たず、宗教にもあまり興味のない柳は、左翼運動に参加し、目黒警察庁の留置所に入れられ、暴力を受けた体験もある。一方、彼は帝国軍に薬剤を売っている中年社長の若く美しい妻「宝屋夫人」に魅了されていた。柳は左翼革命に関する新聞を夫人に対する「性欲に悶えながら」読み、ひそかに自慰行為にふけるのだった。

兵藤正之助が指摘しているように、『快樂』は昭和十一年三月から六月ごろの「思想弾圧のきびしい時代」^④を背景にしている。つまり、『快樂』は性欲、政治、宗教が複雑にからみあう戦前日本の混沌を描いた小説であり、帝国における「父親」という存在が当時の世界における権威を象徴していたことを浮き彫りにしている。主人公の母親は、敬虔な仏教徒である士族の令嬢として生まれたわがままで美しい女性である。この女性を見初め、禁欲生活の誓いを破った過去を持つ僧侶が、主人公の父親である。「小作農の次男として生まれ、農村寺院の小僧になり、その後、あこがれの東京へ出て、最終的には仏教大学の部長におさまった」(135下)人物である父親は、とりわけ息子に深い愛情を持っている。彼は息子のだらしない行動を直接に叱ろうとせず、遠まわしに指導しようとする。息子はそんな父親を尊敬しているが、その「申し分ない」父親の視線の前に恥と自己嫌悪を感じ、よそよそしい態度をとっている。

『快樂』はフィクションであるが、泰淳本人の人生に重なるところが多い。川西政明は次のように指摘している。

『快樂』の主人公は、柳という。名前は明記されていないが、作中に「さっちゃん」と叔母が呼んでいるので、泰淳の幼名「覚」がそのまま使われている可能性がある。

柳覚とは武田泰淳のことであり、『快樂』は自伝的作品であり、登場人物も多く実在人物である^⑤。

「実在人物」の一人は、柳の父親（「お父さん」）である。川西の『武田泰淳伝』（2005年）には、泰淳の実人生と、愛知県出身で目黒寺院住職で仏教大学の教授である父親の家族背景、仏教の背景も詳しく説明されている。しかしながら、ここで私が論じたいのは作家論ではなく、『快樂』における父親の表象である。ゆるぎない思想と態度を持つ父親は、青年特有の不安定さを持つ息子の柳と対照的に描かれており、二人の交流を取り上げることで、『快樂』で描かれている父親像の特異性を明らかにしたい。

本稿では、父親が描かれている三つの場面を中心に分析する。一つ目は、父親が留置場に抑留された息子（柳）に会いに行く場面。二つ目は、彼が世間との付き合いを重視する妻（息子の母親）とは反対の立場を見せる場面。この場面で、母親は息子に、富裕な宝屋夫人との積極的な付き合いを勧め、夫人の熱海の別荘に行かせようとするが、父親は止めさせようとする。三番目は、父親と増上寺（浄土宗）の管長の会話の場面。これら三つの場面を考察し、『快樂』に描かれている父親像がいかに戦前の覇権的規範である家父長的な「男らしさ」に対抗しているのかを明らかにしたい。

第2節 覇権的な家父長制の規範

この場面を分析する前に、家父長制の定義と性質について言及しておく。衛藤幹子が指摘しているように、「家父長制の定義は多様で、必ずしも一致しているわけは」^⑥ないのだが、まず三つの共通点として、以下のことを挙げる。

1. 男女間の権力的不均衡、又その結果として男性の支配と女性の従属
2. 性的支配によって基盤づけられること
3. 個人と家族を超えて政治、経済、社会におけるあらゆる制度やイデオロギーと価値観の中に根を下ろしていること^⑦。

『快樂』では、こうした点における社会的女性観と差別だけではなく、仏教にお

ける宗教的女性観と差別も表現されている。例えば、小説の終わりに、全国から僧侶が増上寺に集まってくる場面があるが、そこでは一人の尼僧も参加していない。

柳の父親は社会においても教団においても身分がかなり高いにもかかわらず、上記の家父長制の定義からはズレている人物である。彼はなによりも仏教教訓を重んじているが、宗教に反抗的な息子を率直に愛している。息子は、「誰よりも非仏教的な人間である」(284)と自己定義しており、生意気な仏教信仰批判を父親にたびたび投げつける。それでも、父親の息子への「愛」は揺るがない。

第3節 留置場での息子と父親の対話

前述したように、教団仏教に興味の持てない息子は左翼運動に傾倒し、目黒の留置所に入れられる。そこへ父親が会いにやってくる。主任刑事の立会いのもと、父子が面会するこのシーンでは、父親の容貌が細かく描写されている。

仏教大学からの帰りに立ち寄った父は、やほくさい背広を着ていた。服装ばかりではなくて、六十歳の柳の父は、どこから見ても、抜け目がないとか、やり手だとか、するどいとか、そういった風格とは正反対な、まじめなだけがとりえな、平凡人であった。口べたで、愛想がなくて、交際ぎらいな父は、警察署の人々の眼から見ても、一目で、この息子にはもったいない好人物の父親とわかるにちがいがなかった。(149上)

当時の「男らしさ」のモデルとしては、さまざまなものが挙げられようが、一番印象的なものは、天皇、特に昭和天皇の「ご真影」ではなからうか。壮麗な軍服に身を包み泰然としたイメージの天皇に対し、柳の父親は、「裏がえしをした上に色のかわった背広」を着て、「底のすりへった靴」を履いた「やほくさい」印象を持つ「平凡人」である。質素な父親は、ことさらに贅沢を嫌って

る。日本の戦時中「贅沢は敵」というスローガンのもと、天皇の「臣民」たる市民は儉約生活を心掛けていた。しかし、柳の父親が質素な生活をしているのは、「国体」を守るためなどという理由ではなく、「口べらしのため子供までよそへあげるくらい」の「暮らしのくらしい小作農たち」（199下）を思うからなのであった。彼は妻を愛していたが、彼女がネコを可愛がり「高価な食べ物をあたえ」たりすると「厭な顔をした」（199下）。「読書と菊づくりの他に趣味のない」柳の父親は、争いを好まない曖昧な性格のために、妻からは軽蔑され、教団の権力者たちからも都合よく使われ、先代の住職が作った莫大な借金の後始末をさせられたりしていた（134下）。

面会中に、父親は息子の調書に書き入れる字が正確でないのを注意する。その朴訥とした物言いに、息子は父親のいつも変わらぬ「愛」を感じるが、それゆえに反抗心が湧き上がり「仏教や革命の大問題なんかと関係があるんか」と独りごちる。この場面では、不器用な父と子の愛の交感が描かれている。

自分に対する父の愛情が、なにげない様子をしている父の一挙一動から、まるで水のようにしみわたってくるので、柳はわざと、よそよそしい態度をせずにいらなかった。（150上）

このような父子間の愛の交感とは、随所に読み取ることができる。例えば、拘留中の息子が取りだす汚いハンカチを見た父親の行動を描いた以下の場面もそのひとつである。

柳は、汚れきった、すえた匂いのするハンカチーフを、ふところからとり出した。はな紙が自由に使用できないので、柳の一枚のハンカチーフは、はな汁にまみれ、その粘液に埃がたかり、黒やみどりの糊が一面にぬりたくられたようで、とり出す指さきもねばついた。父は上着のポケットから、自分のハンカチーフをとり出して、柳にわたし、その汚れきった方を自分

のポケットにしまった。(154上)

この父親の宗教者的な——キリストを思い起こさせるような——ひ弱い者への優しさと慈しみは帝国時代の家父長制規範に基づく「男らしさ」とは質を異にしている。

国家に人生を捧げる生き方を息子に指導するのが父の役目であった1930年代に、我が子の「生活の満足」を優先しようとする父親像がここに描かれている。父親は、父子の様子を見ていた主任刑事に「息子が坊さんになるの」と問われ、以下のように答える。

うちでは別に、どうでも坊さんになれと言ってるわけじゃありません。自分で選んだ職業なら、何でもやりたいことをやれと言ってるんです。(中略) 学問や研究をやるならやるで、法律にふれない範囲でやるつもりなら、それもいいと思ってます。幸いに、勉強させる金はないことはないんですから、勉強だけしていてもかまわないんですが。(中略) ただ、警察のやっかいになったりして、つらい目にあって、それを貫徹できるような男じゃないんですから、それで困るんです。(150上)

父親の物言いに感心した主任刑事は、次のように柳に言い聞かせる。

ここに入っていた思想犯の父親は、裁判長だったんですが、息子さんを日本刀でぶった斬るって騒いでましたからね。陸軍大将の息子もいるし、神主さんの息子もいるし。みんな父親は、不忠者、売国奴は死んじまえとか言って怒ってますよ。お坊さんというのは、やっぱり気がやさしいんですかねえ。こんな理解のあることをいう親ごさんは、あまりお目にかかりませんね。柳、どうなんだ。お父さんの気持が、君にはわからんのか(151上)

柳は「わかっていますよ。いい親爺さんだと思っています」(151上)と言いつつも、主任の前でその「どこから見ても非のうちどころのない、立派な社会人」である父親にむけて、現代仏教の欠点をあげつらい批判する。「今ここで、寺の内情について言わなくてもいいだろう」(152上)と言う父の「つらそうに低い声」を聞いても、息子は批判をやめることができない。

柳の父の苦渋の色は、ますます濃くなった。口をとがらせて、何か言い出しそうにして、やめにした。かと言って黙っているわけにもいなくて、口をもぐもぐさせた。父のハゲ頭は、わずかながら薄い毛をのこして、つやがなかった。(中略) 父も子も、それ以上、その場で語りあうことはできなかった。二人とも、気まずさの壁を貫き通して、あくまで議論するタチではなかったのである。(160上)

父親は主任刑事の目の前で息子に面目をつぶされ、何も言い返せずにその場を去る。

それでも父親は息子の帰還を心から待ち望んでいたのだった。釈放され家に戻った息子はその父の素直な喜びようを目のあたりにする。

(畑から——引用者注) 立ち上がって、こちらを向いた父の眼には、どうしておさえることのできない、喜びのかがやきがあった。口もとも、ごくあいまいな笑いでゆるみそうになった。(164上)

柳は「自分がもし子供をこしらえて、その子供の顔をみるたびに、あんなに嬉しそうな顔つきをすることができるだろうか」(196下)と、自分に対する父親の真摯な愛情に動揺するのだった。

第4節 母 親

小作農の次男として生まれた父親は暇な時、「腐葉土をモッコではこび入れ、人糞を何回も鋤き入れ、瓦の破片や、小石を根気よくふるい出」しても、「なかなか土質の改善されない、畝には不向きな地面であった」（163上）土壌で野菜栽培をしている。他方では、「西洋人くさい美女として、少女時代から騒がれている」（11上）母親は、「中庭の草むしりさえしようとしなく、さらに「畝になど足をふみ入れようとしな」（163上）。母親だけではなく、彼女に同調する寺の「爺や」も父親の園芸の趣味を軽蔑して、「柳の父の畝の手伝いなども、きらっていた」（206上）。しかも、父親の「百姓仕事」について、「バカバカしい。おやめなさいよ。野菜ならいくらでも、八百屋さんで売ってるわよ。くたびれるばかりで、つまらないじゃないの」と、母親が「舌打ちしてしゃべっている」（163上）。だが、世間知らずの柳の父親は、しばしば愚直なまでに反省などしない息子に対して愛情を示しなから、その息子の欠点と、青年に特有な危うさを見過ごしたりはしない。

留置場から目黒のお寺に戻って、息子は、宝屋夫人に抑留生活の疲れを癒すために熱海にある宝屋家の別荘に来るようにと言われる。柳の母親は、世話好きで社交的、財産家の夫を持つ宝屋夫人との関わりを有利に考え、息子にぜひ行くように言うが、父親は派手な夫人に不信感を持っていて行かせたくないと思う。いつもの通り、父親は直接には反対はせず、遠まわしに拒否を口にする。

「お前、宝屋さんの別荘へ行くつもりか」

と父は柳にたずねた。そして、古びた銀時計を、古びたチョッキのポケットからとり出した。

「いや、まだ決めたわけじゃありません」

「そうか。あれ、もうこんな時間か。それじゃあ……」

やっと滑りこんで間に合ったり、一分でも遅刻したりするのが、何よりきれいな父は、いつでも不必要なくらい、早目に家を出るのだった。

「おれは熱海というところは、あまり好かんよ。ぜいたくで、ゴテゴテして
るばかりで。そんな別荘へ行くくらいなら、田舎の寺へ行かないか。田舎
の寺へ行って、百姓の仕事でも見てきた方が、よっぽどタメになるよ」

「うん、ほくも田舎へは行ってみたいんだ」

「読みたい本があったら、何でも買ってやるから。その本を持って、しばら
く田舎へ行っているよ」(219上)

しかし、これを聞いた母親に「でも、どうなんでしょう。農村なんて一日いた
たら、たいくつしちまうんじゃないませんか」(219上)と口を挟まれ、父子の
計画は実現しない。『快樂』に描かれる美貌の妻は、夫や息子よりも強い主張を
し、自らの意思を通すのである。

第5節 父親のころ

家父長制は政治の世界のうつしであるという衛藤幹子の指摘のように、『快
楽』の家父長の描写から、泰淳の体制への批判を読むことができる。典型的な
家父長であり、右翼分子でもあったはずの柳の父親は、政治的な緊張が高まる
につれ、増上寺の管長との対話の中でおぼろげにはあるが、戦争に向かって
いた当時の日本の政治状態を批判するようになっていく。増上寺の管長は、柳
の父親の幼い時代の友人で、他者に言えない秘密話を打ち明けるほど親しくし
ている。青年将校の「パリパリ」に訪問を受け、脅しを受けたことを打ち明け
た後で、管長が「何いっても今は軍人の世の中だからなあ」と不満を漏らすと、
柳の父親も「うん、そうらしいな」と相槌を打つ。一方、父親は用心深く、ど
んな人にも政治を直接には語らない。しかし、管長と同様、父親も右翼分子に
厳しく批判されて、息子の柳は地元の町会議員から父親の評判を耳にする。

おれは警察署長からたのまれてるんだ。思想犯を監視するように、くれ
ぐれも依頼されているんだ。お前のことは、特高によくよく報告しておい

てやるよ。浄土宗の坊主にはアカが多いから、注意しなくちゃいかんと、忠告しておいてやるよ。お前ばっかりじゃない。お前の親父だって怪しいもんだ。(略) 息子のアカを許しておく親父は、つまるところアカじゃねえか。(195下)

「片膝を立てて」無然と話を聞いていた柳は、「ぼくの父は、君なんかより十倍も百倍も立派な人間なんだ」(195下)と答える。この返答には、彼が父親に面と向かって示すことのできない深い愛情が込められている。

柳の父親も管長も教団内では長老として尊敬される人物であるが、この二人のプライベートな会話では、彼らのような保守的な人間でさえも「軍人の世の中」に不安や不満を持ち、批判的に見ていることがわかる。父親は、自分の意見を遠慮なくぶつけてくる息子を深く愛し、息子もまた父親の純粋な「愛」を感じている。管長と父親の対話を聞きながら、息子は「お父さん」の「素朴な」態度にあらためて感じ入る。

その管長の正直な態度にくらべても、父の方が、もっと素朴で飾り気がなく見える。自然に見える。それが柳には、たまらなくうれしかった。(287下)

この息子の視点には、「飾り気のない」父親への深い尊敬と愛とともに、「自然」への憧れが表れている。

父親と管長は、菊の栽培について話しながら、当時の大日本帝国の目的についても語り合う。管長が最近出回っている新しい菊の種類について話すと、父親は「うん、新しい種類が出ている。おれはそんなに色々な種類は作っていないが」と答え、彼にとっての「土いじり」について語りだす。

土をいじっているのは好きだからな。ともかく、黙って一人でやっていれ

ばいいのだ。花が咲いて人に見せるといったって、どこのどいつに見せたらいいのか分らんよ。いい花だとほめられたところで、どうにもならんわ。作者は作ってあげればいいのだ。作り出したものを見せて、人からほめられて嬉しいと思う者もあるかもしれないが、おれは別にそんなつもりはない。特別上等な花が咲かなくてもかまわんよ。一年中、何かしら花を育てるために手を動かしていれば、それで気がすむんだ。(289下)

父親にとって、「土いじり」は花を咲かせる目的のために行うものではない。管長も父親も帝国の野望とは世界を支配するということと理解しているが、父親の「土いじり」に対する考え方から、彼には何者かを「支配」したいという欲望がないのが読み取れる。そのかわりにあるのは、誰かを支えることへの志向である。

1930代の半ばの日本を舞台にした小説に、「土をいじる」ことに没頭している人物が登場するという点では、右翼の農村主義ファシズムとの関係において解釈することもできるだろう。しかし、目黒の寺院の住職で仏教大学の部長の仕事もしている父親が、外界の激しい変遷に対して、ひそかに展開する個人的な抵抗として、それを読むことも可能である。父親は、自分にとっての菊の栽培は「土いじり」に過ぎず、育てた菊を他人に見せびらかしたり、品評会で栽培の技を競うという行為とは違うことを暗に主張している。彼にとって、多くの菊の栽培家が持つ競争意識は、大日本帝国が世界の舞台で表明していた無理やりな自己主張、大惨事を引き起こす一因ともなる自己主張を想起させるものなのである。社会に対して自分にはできることがあまりないと感じている父親は、菊の栽培を通して、世の中における「愛」や「不安」、そして体制への「抵抗」をひそかに表現しているのではないだろうか。

第6節 むすび

「ぼくは正直のところ、ほかの男の誰よりもぼくの父が好きなんだ」(275下)

という息子と、息子が帰省するたびに「無表情な」顔を「喜びのために」ゆるませ、「一瞬、輝くよう」（195-196下）な眼を見せる父親、この父子の静かな「愛」が『快樂』の主題のひとつである。国家への絶対的な帰依を息子に教えるのが父の役目であった1930年代に、危うい青年期を過ごす息子へ優しさと慈しみの視線を無条件に注ぐ父親像を描く『快樂』は、帝国日本の軍国主義に対する痛烈な批判を表した小説と読むことができるだろう。

【注】

- ①武田泰淳「あとがき」『快樂（下）』新潮社、昭和47年（1972年）、327頁。本文の引用は、この1972年に新潮社によって出版された『快樂（上）』、『快樂（下）』により、頁番号を付した。
- ②兵藤正之助『武田泰淳論』冬樹社刊、昭和53年（1998年）、182頁。
- ③兵藤、167頁。
- ④兵藤、169頁。
- ⑤川西正明、『武田泰淳伝』講談社、2005年、9頁。
- ⑥衛藤幹子、「家長制とジェンダー分業システム起源と展開」『法学志林』、103（2）、1-58、2005-12：3。
- ⑦衛藤幹子、「家長制とジェンダー分業システム起源と展開」『法学志林』、103（2）、1-58、2005-12：4。

* 討論要旨

長田真紀氏は、柳の父親は理想的な人物として描かれるばかりでなく、批判的にも描かれているのではないかと問題提起した。たとえば、世俗的な欲望を持たないように見える柳の父親が、都会的で美しい妻と結婚しているという設定には、田舎の文化が都市に吸収されていくことに対する作者の批判を読み取ることができるのではないかと。また、僧侶でありながら家族や菊作りに執着する父親自身も矛盾した感情を抱えていたとすれば、非仏教的な息子と仏教の世界に生きる父親という二項対立的な図式は成り立たないのではないかと。さらに、以上のような父親像には、武田泰淳自身の父親に対する批判的なまなざしを読み取ることができるのではないかと。以上のような長田氏の問題提起に対して、発表者は、作者の実人生と小説の間にはどのような関係があるか、という問題にはかねてから関心を持っており、今後も考察していくつもりであると回答するにとどめた。